



「ほらとっとと歩きなさいグズ」

その男は女性に尻を蹴飛ばされる。女性は舌打ちをしながら男性の首に巻かれた奴隷用首輪を引きながら店舗内の通路を歩いていく。どうやら男性に対する配慮は一切しないようだ。サキュバス族特製の電子チョーカーによって二足歩行という行動を制限された男性は苦しい表情をしながら四つん這いで歩いていく。その前方をドレスを着た女性が歩いていた。

その女性は鮮血のような真紅のドレスを身に着けていた。ふと男性は顔をあげてみる。するとその小ぶりの臀部が引き締まっているのがよく見えた。ハッとした男は慌てて視線をそらそうとしてしまう。だが、悲しくも横目でチラチラとその女の臀部を目で追ってしまうのは、悲しき男の性質というものなのかもしれない。

「はぁーほんとクズですねー」

「……」

「ここが嫌で抜け出たくせに女性のお尻は見ると…ほんと人間の雄ってくだらない」

男は全裸のまま惨めに通路を歩かされていく。時折、その女、ユアンはつまらなそうな表情をしながら男の首輪につながれたリードを引いていく。まるで犬を散歩するように何気なく行われるその動作。ソレはここ、サキュバス達が住まう女淫都市においては至極ありふれた光景なのであった。彼には二足歩行する権利も、発言をする自由もない。裸体を晒したまま惨めに四つん這いのまま地面を擦っていくことだけが、このサキュバス都市から逃げ出そうとした犯罪者における唯一許された行動なのだから。

一人と一匹は歩いていく。道中ミニスカートを身に着けた幾人かのメイド達とすれ違った。四つん這いのまま全裸で惨めに歩いていく男性を見た彼女たちはくすくすと笑いながら通りすがっていく。可愛らしい少女達の声に対して男は顔を赤く染め上げながら睨みつけるように歩いていく。だが一方、彼女たちに視姦された事で彼の体は反応してしまう。何より周囲に満ちたサキュバス特有の淫らな香匂によって彼の脳内は浅くふわふわとした恍惚感に包まれていく。

なんとかして隙を見つけて再び逃げ出さねばならない。彼は自身の頭を強く振りながらなんとかして気を引き締めなおそうと試みた。そんな彼の様子を知ってか知らずか彼女はその店の通路を歩いていく。彼女は男を連れたままとある部屋の前へと移動した。

コンコンコンコン

扉を4度ノックする。そうして中から女の、艶やかな声が響いた。ユアンは中にいるこの店舗の主の返答を得ると意気揚々と扉を開ける。扉を開けた瞬間に男の鼻腔はその独特なフェロモンで満たされていく。まるで高級な美酒のように、ただそこにあるだけで人を酔わせてしまうような匂い。上級サキュバス特有な強烈な淫臭に彼はくらくらめまいを感じてしまう。そうして男性は反射的にその中の主を見る、見てしまう。

そこには息を呑む程の絶世の美女がいた。

それはチャイナ服に身を包んだ妖艶な美女であった。その美しく端正な顔立ちは男が生涯見たことも無いほど整っており、その嫋やかでしなやかな黒髪は腰元まで伸びている。東洋の神秘、まさしくアジアンビューティーを体現するような輝くような美女であった。

その双瞳はまるでエメラルドの如く魅力を放ち、透き通るような緑色をしていた。覗き込んだだけで闇へと落とされてしまいそうな程、深く妖しい瞳。

その身体付きもすさまじい。そのすらりと伸びた肉体には無駄な肉が一切ついて居らず、チャイナ服から見える手足、その肌の部分には世の女性達が羨むようなハリと艶にあふれた美肌が広がっていた。その長いスリットから透けて見える美脚など世の雄共が武者ぶりたくなるようなゾッとする程の色香を漂わせていた。

女の身体に唯一歪な部分があるとすればそれは胸元だろう。Gカップにも匹敵するだろうそのあまりに豊かな胸元は男が居た外界では目にする事など出来ぬような、それはもう豊かな母性の象徴であった。紫色のチャイナ服を苦し気に押し上げるその胸元はその端正の取れた完璧な肉体美に影を落とす。

だがその部位は奇妙な事に視れば見るほど違和感は薄れていき、次第に目が離せなくなるような不思議な色香を放っていた。きっとこれすらもこの妖女にとっては自身の魅力を更に押し上げる、極上の美を彩るチャームポイントの一つにすぎないのだろう。その美女、この浴場施設を経営する女主人リンシャンは男を連れてきたユアンに向かい合う。

「それでそちらの男性が…」

「ええそうです、犯罪者を連れてきました」

「いつもご苦労様、ユアン」

「こいつってばこの城塞都市から逃げようとしていたんですよ、馬鹿ですよー」

「もう去勢処理済みかしら？」

「いえ、一応初犯なので社会労働奉仕刑ですね。こちらが詳細です」

「ふむ…今回の子は随分と反抗的なのね」

ユアンから書類を受け取るリンシャン。彼女は高級革製の肘掛け椅子に腰かけながら手紙をデスクに置く。そうして彼女は長い溜息をこぼしながら眼前の男を見下した。

どうやらこの男性はこのサキュバスが支配する城塞都市からの国外闘争を試みたようだ。資料によると男性は城壁に設置された関門を突破しようとした所、門兵のサキュバスに逃走を阻止されあっけなく逮捕されたい。人類とサキュバスはその魔力、知能指数もさることながら純粋な身体能力でも大きく差が生じている。筋力、速力、持久力、トップアスリートですら到底叶わぬ程の身体能力を所持するのが彼女たちサキュバスという種族なのである。端的に言えばこの世界における人類の上位種族であり、人類こそが家畜にも等しい下等種族なのである。

話を彼へと戻そう。男は女主人から目を離す事ができなかった。椅子に腰かけた実に美しいリンシャンの脚、より具体的にはその淫らなチャイナ服のスリットから覗けるつややかな脚とその美肌から、目を離す事が出来なかったのである。

ごくりと唾を呑む。リンシャンが身じろぎをする、ただそれだけで揺れ動き、ちらりと見える淫らな存在が男の浅ましい欲情をこれでもかと刺戟してしまう。視る、ただそれだけの行為で男は正常な思考と微弱な快楽を感じてしまう。必然、男のソレが浅ましく反応してしまった。

「あらあら？」

「…ぷっ、あっはっは」

惨めに隆起してしまうのは悲しき男の性であると言えるだろう。彼の股間の男性器は惨めに勃起してしまっていた。慌てて隠そうとするその男性、だがもう遅い。男の首輪につながれた赤いリードの先を掴んだリンシャンはそのまま男に対して命令を下した。

場所は変わる、そこは大浴場が備え付けられた浴場施設であった。そう、先ほど逃亡者を引き受けた女主人リンシャンが経営するスパ『楽園の海燕』は南国式のリゾートをテーマとした浴場施設である。地区を問わず様々なサキュバス達が地下からくみ上げた極上の美湯を求めて日々訪れる、そんな大人気の浴場施設なのであった。

ポンプから勢いよく熱水が浴槽へと流れ込む。大きさ十数mにも及ぶ浴槽がいくつも並んでおり、轟轟と流れ込む湯からは湯気がほんのりと立ち昇っていた。地下からくみ上げた天然湯に精液やハーブを織り交ぜた独自配合の天然温泉は美肌としての効能があるとサキュバス達からも大好評なのである。そんなスーパー銭湯には今日も又多くの美女達がやってくるのであった。

姦しい女の声が浴場に響く。がらりと戸を開けて銭湯へと入っていく彼女たちは年若い、可愛らしい少女のような女達であった。彼女達の風貌はフレッシュな若さと美しさで溢れていた。そんな青春あふれる美しい裸体を彼女達はおしげもなく披露している。身体にボディータオルを巻く若い女。その発達した巨乳を堂々と見せつけてくるツインテールのお嬢さん。自慢の黒髪をポニーテールで包んだ大きな尻を持つ少女。彼女たちは皆がその美しい裸体を惜しげもなく、まるで見せ付けるかの如く曝け出していた。

「おやあ？」

いぶかしむ声。その足裏に伝わる感触を確かめるかのようにその場でふみふみと足踏みを繰り返す。少し汗で汚れたその素足からむぎゅむぎゅとした独特の感触を感じる彼女。彼女は尚もおかしいなと独り言をつぶやきながら足踏みを繰り返した。しかしその声色とは別に彼女は愉悅に満ちたサディスティックな表情をしているではないか。そんな彼女の足元には、このありふれた銭湯にはないはずの異物が全裸で寝そべっていた。

「あはは～床がなんかもぞもぞするねー」

彼女が踏みしめる浴場にはもっこりと浮き出たタイルがあった。否、大浴場の一角その床下には一人の男性が埋められていたのである。大の字の形に凹んだ窪み。そう、丁度成人男性が入れるような大きさのその窪みには裸体の男性が床に埋められていた。他床の高さに合うようにとその肉体が哀れに固定されている。調節された高さ、その床に一部からは、ぽっこりと雄のシンボルがはみ出していた。情けなくその存在を主張する雄の象徴のなんと情けない事か。

両の腕を大きく広げ、両足もまた強制的に開脚させられた姿勢のまま、固定されている男。手足を窪みのような凹みに入れられた為、普通には見えないだろう。床に大の字でねそべった人間の手足を床に埋めて上半身と下半身を裸にひん剥いたまま拘束されている、とでも言えばイメージしやすいだろうか。男の口部には口枷が嵌められている。唾液をだらだらと垂れ流したまま浴場へと入ってくるサキュバス達を恐怖の視線で見つめ続けている。裸体のままキャッキヤと大浴場を楽しむ彼女たちの姿は固定化された彼には一部しか見えていないだろう。ただそれだけで十分だった。

男の視界に入ってくる肌色の刺激物。そのすらりと伸びた脚、吸い付きたくなるような臀部、犯したくなるような乳房。それらが何十人という女体の波となって男の精神を犯してくる。彼は声も出せないままただ惨めにうめき声をあげ、その桃源郷の床の一部となっているのだから。そんな哀れなマゾ男性を少女はにやにやと見つめた。

はーいと返事をする少女。何処かへと駆けていく少女を横目に眺めながらその人妻サキュバスは男を見下した。おっとりとした眉が淫らな人妻を連想させる。それは見るからに優しいような妙齢の女性であった。巨大といって差し支えない豊かなバスト、美しい腰回りを湯気が照らし出している。一糸まとわぬ天上の美。高級な香水でもかけているのだろうか、その人妻の肉体からは香しい薔薇の香りがした。

「うっぐ！」

「あら意外と踏み心地が良いかも」

「~~~~~」

「うふふ、マゾくん頑張れー♪がんばれー♪」

男のへそへ、体重をかける人妻。その弾むような声援とは裏腹に容赦のない行動でった。幾等女と言えども体重をかけられてはひとたまりもない。ましてやその人妻のように恐ろしまでの魅力的な胸、グラマラスな肉体をもっているのだから猶更である。まるで玩具で遊ぶ子供のように無邪気で...だからこそ恐ろしい魅力にあふれていた。巢に囚われた蝶をもてあそぶ蜘蛛のように残酷で、玩具人形の手足を笑いながら引きちぎろうとする幼児のように嗜虐的な行為。彼女の恐ろしい程の淫靡な身体が哀れなマゾ男をもてあそんでいた。

「あれーベルさんじゃないですか！」

「奇遇ですねベルさん」

「あらクロちゃんとシロちゃん」

男をもてあそぶ人妻の前に妖艶な双子が現れる。褐色の肌を持つクロと美しい白い肌と金の髪を持つシロである。人妻のベルよりかは未発達な、それでもむせ返るほどの色気を振りまく彼女達は確かに淫魔であり、サキュバスだった。

相反するようなその肌の色が互いの魅力を引き立てる。相乗効果としてその女性としての淫らな色気を更に引き出しているのだ。もしもこんな女達を抱けるのなら富豪達が幾つもの札束を差し出したっておかしくない。そう思わせるほどの性的な魅力がそこにはあった。

「この間のおすそ分けありがとうございます！」

「シロも私も大喜びでした。とてもおいしかったです」

「うふふ、喜んでいただけたなら良かったわ」

「クロったら美味すぎて太っちゃうかもーだなんて」

「べ、別に太ってないのです！シロは一言余計なのです！」

「あら〜二人位の年齢ならもっと食べなきゃだめよ」

楽しそうに談笑を続ける三人。しかしその楽し気な会話の下では恐ろしい程の淫らな足さばきで男の肢体がもてあそばれていた。男の右胸の突起を起用につまみくりくりと刺激するシロ。男の口内へと無理やりねじ込み舌を蹂躪しようとするクロ。熟練の足さばきで、マゾ床を翻弄している。流石双子と呼ぶべき連携の上手さであった。その巧みさは何十年と男をもてあそんできた妖姫にも劣らぬ蠱惑的な技術であった。

そして人妻のベルは男の股間を刺激していた。脚の親指でくすぐるようにその象徴の周囲へ円を描く。ぴくりと反応するそれ、さわりと軽く触れるとそれ以上の時間をかけてまた周囲を丹念にいたぶっていく。堪らずに反応していくその粗末な物をにやにやと笑いながら人妻は見つめた。人妻にとって雄の絶頂など赤子の手をひねるよりも簡単にできる事だろう、だからこそ女はそれを許可しない。苦しみもがく男の哀れなソレを嘲笑しながら見ているだけなのである。

「あーあ私疲れちゃったなー」

突如シロは独り言を言う。脚をぶらぶらとさせながら疲れたと口にする彼女。彼女の発達したその巨乳からは汗と湿気により水滴がぼたりと垂れ下がった。いやらしく張り出た胸元から垂れ墜ちる水滴、その水滴を顔面でうけとめるマゾ。何事なのかと反応する間もなく少女は男の顔面へと歩み寄ると...

「っ！？」

「あはっ♪こんなところに椅子はっけーん！

「~~~~っ！？！？」

「あはあん♡くすぐったいよお」

男の顔面へと、その美しい尻をおろした。当然、悶える男。もごもごと惨めに口を動かすその男の息遣いにいやーんと反応するシロ。当然、そんな彼女はニヤニヤと笑っていた。動くことすら許可されていない哀れなマゾ受刑者に対して嗜虐の笑みを浮かべているのだ。

美しい工芸品のように透き通るような玉の肌。ばいんと淫らに突き出たそのお尻のなんと美しい事か。そのしっとり濡れるような柔肌が男の呼吸を容赦なく塞いでいるではないか。呼吸ができない！男は必死に呼吸をしようと身体を震わせるものの少女はそれを許すはずもない。

「私は右の突起をコリコリ〜！」

「っ〜」

「マゾワンちゃん気持ちいいでちゅか〜」

「それじゃあ私は左の突起をなめなめしてあげます」

「こっちも忘れてはだめよお」

「ッ！」

「気持ちいいの一杯ですね、お兄さん」

突如、男の肉体に快楽がもたらされる。それは天国であった。それまでの責めとは一変した極上の快感だった。男が体験したこともない程の、信じがたい程の快楽が男を襲った。